

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2015年7月 NO.186



[もくじ]

2～3 ニューオリンズジャズとの出会い…田中涼

4～5 時に振り返り、往く針路を定める～「高知生音」チームとSalvador de Ustreamの展望～…松井利彦

6～7 具体の画家—正延正俊…奥野克仁

8～9 高知が生んだ芸術家、國友須賀の生涯を舞台に！…國友悠一郎

10～11 「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」始動しました!!…小松由佳

12～13 土佐の自然を未来に活かす『高知県有用植物ガイドブック』の刊行…村井亮介

14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「天の川」清遠実奈

公益財団法人高知市文化振興事業団

ニューオーリンズジャズの田中涼

田中 涼

二〇一四年八月末日、僕はニューオーリンズにいた。

音楽大学でビバップやモダンジャズ、コンテンポラリージャズのドラムを勉強するために高知から上京してきて八年目の出来事だった。

ニューオーリンズとは、アメリカ合衆国ルイジアナ州南部にある同州最大の都市だ。メキシコ湾に面しているミシシッピ川の河口に位置する場所であることから、ミシシッピ川流域の農産物の輸出港として発展し、工業都市であり、観光都市としても有名だ。そして何より市内のトレメ地域にある「コングスクエア」は、「ジャズ発祥の地」として知られ、ジャズの歴史を語ることに於いて、欠かせない場所だと言える。

そもそも、なぜニューオーリンズに行くことになったのか。

大学時代に出会った二人の人物が大きく関わってくることになる。まず一人目は、クラリネット奏者の新谷健介だ。

彼は、僕が大学二年生のときに新一年生として大学にやってきた。パットと見地味な印象をうける人だったが、ひとたび楽器を持つと、それまでの印象とは一転し、今まで聞いてきたクラリネットとは明らかに違う、エッジの効いた演奏スタイルの人だった。そんな彼と初めて等しい形で演奏したのが、二〇〇九年から行われている金沢ジャズストリートに二年続けて参加した時だった。クラリネット、ピアノ、ベース、ボーカル、ドラムという編成で

ヤズスタンダードを中心に演奏したのだが、二、三日間寝食をとむにして演奏や現地観光すると、お互いに緊張感がほぐれ、以前よりも数段仲良くなれた。音楽も、人間関係がとても重要で、一緒に演奏したいか・したくないかは、お互いの人となりによって大きく変わってくる。

こうして彼と一緒に演奏する機会が増えていった。そんな中で、彼がニューオーリンズの音楽に精通していることを知り、ニューオーリンズの音楽にも興味を持つようになっていった。余談ではあるが、ちょうど同じ時期に大学で教授を務めていた中村誠一氏に誘われて、ニューオーリンズスタイルのブラスバンドで演奏するサークルができ、たことも興味を持つきっかけを与

えてくれたように思う。

時は流れ、新谷健介から卒業研究のサポートに誘われた。僕の通っていた音楽大学は、卒業研究で「ライブ録音」か「スタジオ録音」を提出しなければならぬ。彼は、後者の「スタジオ録音」を選択した。三曲録音した中の一曲が、ルイ・アームストロングの『ポテトヘッド・ブルース』で、いわゆる「ニューオーリンズジャズ」のスタイルの再現だった。編成もトランペット、イシヨナルな編成でトランペット、トロンボーン、クラリネット、ピアノ、バンジョー、ベース、ドラムだった。

このときバンジョーを弾いていたのが、僕をさらにニューオーリンズに近づけた、もう一人の人物。バンジョー・ボーカルの丸山朝光だ。ギターリストと一緒に演奏する機会は多々あったのだが、バンジョー奏者と演奏するのはこの時が初めてで、とても新鮮だった。またボーカリストとしても活動しており、ハスキーな歌声は聞き手も演奏者側も魅了する印象を僕に与えた。彼は、新谷健介が音楽大学に来る以前に通っていた大学の後輩にあたる人で、付き合いが長い

らか、新谷健介自身とても信頼を寄せていた。また、リズムに対する意識の高い人で、様々な曲のグルーブ（ノリ）に関して、よく話をした記憶がある。また英会話も流暢なのでニューオーリンズ在住の知り合いも多いし、一年に一度はニューオーリンズに行き、現地のミュージシャンと共に演奏をしている。今でも変わらないことだが、音楽に対しても人に対しても熱いハートを持った人だ。そんな彼からニューオーリンズの音楽や街並み、現地の人のことや、今流行っているミュージシャン、彼の好きなアーティストのことなど多くを教えてもらい、ますますニューオーリンズに興味を持つようになった。

ここから、少しずつ新谷健介、

丸山朝光と演奏する機会が増えていくようになる。公共の施設で演奏したり、吹奏楽と共演したり、ホテルで演奏したり……、次第にメンバーも固定されていく



筆者：後段左

ようになり、こうしてできたバンドが「新谷健介オノマトベ」である。クラリネット、バンジョー、ピアノ、ベース、ドラムの五人からなるバンドのコンセプトは、ブルース、賛美歌、ラグタイムといったニューオーリンズのトラディショナルなジャズを演奏することだ。一九〇〇年代初頭に生まれたとされるジャズの初期のスタイルで、その当時演奏されていた曲を演奏している。「聖者の行進」や「リパブリック讃歌」など、どこかで聞き馴染みのある曲もきつとあるはずだ。

ビバップ以降のジャズと、この当時のジャズとで明らかに違うのは、曲の構成も然ることながら、「ドラムの刻むリズム」であるよ

うに感じる。

多くの人が想像するジャズのドラムというのは、シンバルで「チーンチッキ・チーンチッキ……」と演奏する姿だと思うが、ニューオーリンズジャズのドラムは、「ドンタ・ドンタ……」といった感じでバスドラムとスネアドラムを中心にリズムを作っていく。そうして盛り上がったクライマックスで初めてシンバルを刻むという独特なスタイルだ。鼓笛隊のドラムをイメージしていただくと分かりやすいかもしれない。このニューオーリンズなドラムのスタイルというのは、日本でいうところの祭りで叩かれる太鼓に近いものがありニュアンスや空気感など譜面では表せない部分を多く持っている。

どうすれば、この土着なニュアンスを表現できるようにするのか、と考えていた矢先に、バンジョーの丸山朝光から「ニューオーリンズに行くけど、行く？」と誘われた。もちろん二つ返事で「行く」と答え、僕は、ニューオーリンズに行くことになった。改めて今考えると、とてもいいタイミングでニューオーリンズに行くことができたように感じる。

最近よく思うことだが、人の縁

たなか りょう

一九八八年生まれ

洗足学園音楽大学ジャズコース卒業。所属するニューオーリンズジャズバンド「新谷健介オノマトベ」は、昨年末「第34回浅草ジャズコンテスト」バンド部門グランプリ、さらに浅草ジャズ賞を受賞。東京都内を中心に活動中。

時に振り返り、往く針路を定める

「高知生音」チームと

Salvador de Ustreamの展望

松井 利彦

「サルヴァドール・デ・ユーストリーム (Salvador de Ustream)」は、筆者が拙いMCを務める、インターネットを介した動画配信企画。高知市中心部で営業するバー・サルヴァドールを会場に、主に高知県内、あるいは高知県に所縁のあるミュージシャンやパフォーマー、アーティストをゲストとして迎え、彼、彼女らのライブ・パフォーマンスにトークを交えた構成で撮影、同時にネット配信する、「高知生音」チーム(筆者所属)の主要コンテンツだ。

この文を書いている二〇一五年五月現在、三年弱の間、途切れなく毎月の配信を続け、数多くのアーティストたちを取り上げてきた。

溢れた配信映像が呼び込み、また売り込みの大切な材料になると確信したという。

土佐人の例に漏れず酒好きで、ギターリスト、音響マンとしても鳴らす片岡が殊に愛するのは、人と酒、音楽の交錯しあう場が醸成する無類の楽しさ、そしてポジティブな交流がもたらす創造性だ。彼はそうした場に関わる生き方を、絶えることなく続けてきた。だからこそ、現在の自分があり、場を設定する側の人間というポジションを築けたと彼は言う。片岡が、ふとしたきっかけで活用することになったインターネット動画共有ツールに大いなる可能性を見出したのは、あるいは必然の成り行きだったかもしれない。

一方で、片岡の行っていたネット配信を見聞きし、その手法に違った角度から可能性を見出して彼の元を訪れたのが、片岡の大学時代からの友人、また音楽仲間である川上隆だった。川上は学生時代、また就職後を通してさまざまなバンドやユニットでドラムを叩き、また自ら作曲や録音まで行う実行志向のアマチュアミュージシャンであり、他方、各所のライブハウスなどに足繁く通う熱心な観

今夏七月に配信企画開始から三年を迎えるにあたり、筆者は同企画の言わば発起人である片岡厚志・川上隆の二名に、改めて、なぜこうした活動を始めたのかを尋ねる機会を持った。ひとつの節目に差し掛かったいま、これまで遮二無二に活動を続ける中で、ともすれば置き忘れがちだったその根もと、どのような未来像を描いて事を起こしたのかをいま一度明らかにし、採るべき針路を明確なものとする必要を感じたのがその理由だ。

アルコール飲料を提供するだけでなく、多種多様なミュージシャンを隔てなく招き、受け容れてその生演奏を店内に響かせ、ボーダーレスな紹介と交流の場となつて

衆でもある。

そうして複数の立場から音楽に関わる中で、川上には常に抱えていたジレンマがあったという。それは、ジャンルや音楽的な共通言語からいっしか築かれるミュージシャン同士、あるいは観衆や現場スタッフも巻き込んだ「内輪」、そしてそれが明確になればなるほど高くなる、他者のまたぐ敷居だ。ここに現れる、ミュージシャンとしての親和性と、他者との距離との同時形成の矛盾こそが、彼の言うジレンマだった。川上にとつて、人口、人材そのもの、またメディアなどへの露出の機会が少ない地方社会の音楽シーンが、こうしてさらに小さな寄り合いを生じて多様なアピールの機会、ひいてはより広く大きな場に踊り出るチャンスを減じてしまっていること、また自らもその小社会に甘んじて属してしまっていることは、コンプレックスにさえなっていたという。

しかし逆説的に、特異な小社会が相互に、容易につながることでできる環境があったとしたら、非常に興味深いものが生まれうるという思いが彼にはあった。それは、音楽性の相違を超えたバンドやユニットでの演奏を経験した時、誘

いることから、酒客のみならずミュージシャンや関係者にも一目置かれる存在の店、バー・サルヴァドール。その店長であり、サルヴァドール・デ・ユーストリーム企画の発端となる試行を始め、事の起りそのものをつくり出した人物こそ、片岡厚志その人だ。

その試みとは、インターネットを介した手軽な動画共有サービス「ユーストリーム (Ustream)」を活用し、サルヴァドール店内で行われているライブを配信するというもので、お分かりの通り、この時点で企画の骨格がすでに形作られていたことになる。

そこで片岡にこの当時の配信の主たる狙いを問うと、ひと言「宣

われるままに見知らぬライブ会場に足を運んだ時、それらの打ち上げに居合わせた時。そんな折に時として生まれる、新たな関係性へとつながる出会いや、思いもよらなかつた新しい価値観：これらに烈しく心を動かされた経験から、彼に強く根付くこととなった思いだった。

表現の根っこにある人間性ありのままが露わになり、それらがつながった先にこそ創造的な未来があるという彼の考えに、交流の場に重きを置く片岡が通底する価値観の共有を感じたことは想像に難くない。ふたりはすぐに意気投合し、企画を現実のものとすることを決めたという。

このように、活動を維持、発展させてきたその動機、源の部分を詳らかにしていくと、強い願いと目指してきた展望が明らかになる。それはすなわち人と人との「交流」であり、その交流を通して共有され、ぶつかりあう、「ありのまま」の風土や人間のあり方：つまりは異なる文化同士が共に刺激しあうことで、新たな創造が起きることへの希望と期待だ。

だからわたしたちは、活動を通して得てきたノウハウやハウトゥ

伝だった」と彼は返答したのだが、少しばかり話を掘り下げていくと、これには重要な含みが秘められていることが分かった。すなわち、高知県外を拠点とするミュージシャンたちへのアプローチだ。片岡は当時、県外から高知を訪れてライブを行なおうとするミュージシャンへの対応の際、条件面などの実務的なやりとりはともかくとして、言葉や文字では説明しづらい現場の環境を伝えることに苦慮していたという。こうした際に最も簡便で明瞭なのは、現場を実際に観てもらうことだという発想に至った片岡は、しかしライブの様子をただ動画に収めるのではもったいない、店にいない人にも観てもらえる方法はないかと思案、結果ユーストリーム配信に辿り着いたというわけだ。

しかし配信を実際に行ってみると、店舗の内観や機材の配置、ライブ時の演奏スペースと客席とのバランスなどを映像で一目瞭然に確認してもらった資料となる一方で、土佐弁のギャグが飛び交い、新しいもの、異質なものを積極的に面白がり、楽しむ、高知県らしい雰囲気そのものが見て取れるということに気づき、このローカルズムに

を包み隠すつもりは毛頭無い。むしろそれらを積極的に伝え、様々な地域で同様のローカルな活動が起ることをこそ願っている。目指すのは、場所や考え方の異なる、いや異なればこそ面白い、文化×文化の垣根無き掛け合いだ。わたしたちは常にその渦中において、見たことも聞いたこともない新しいものが創られる瞬間に立ち会いたい。だから、その一助となるべく活動を続けていく。メンバー各々が描く展望は、文化の交流と創造を目指してさえいれば、即チームの目標となり、実行に移されていく。これが、針路だ。

Bar Salvador

高知市はりまや町3-4-1 3F

定休日 日曜日

Email salvador.kochi@gmail.com

HP <http://spirited>

soundgroup.wix.com/bar-salvador



まつい としひこ

「高知生音」チーム構成・MC。

具体の画家—正延正俊

奥野 克仁

戦後間もない一九五四（昭和二十九）年、前衛画家でありオーガナイザーでもあった吉原治良のもと結成された美術集団「具体美術協会」は、文字どおり戦後日本を代表するアーティスト集団として世界的に評価されている。今日でも国内外でたびたび展覧会が開催されるなど、その評価は上昇し続けている。吉原は芦屋を拠点に活動しており、彼を慕って集まった若いアーティストたちは関西人が多かった。東京ではなく、関西発の文化事象が世界に発信したことがまず痛快なことであり、それが前衛美術であったことも同様である。

彼らは吉原が掲げたモットー「人の真似をするな」、「今までにないものをつくれ」に基づき、奇天烈で破天荒なパフォーマンスを繰り広げた。例えば嶋本昭三は瓶詰した絵具を画面上で炸裂させ、村上三郎は紙を張った枠を何枚も並べ、その中を突き破って走り抜けた。彼らは同時代の美術の射程を拡げることには貢献したのだが、その一方で「現代美術はわけがわからない」という一般的な見解を定着させることにも一役買ったのは間違いない。

そんなハチャメチャな「具体」のメンバーの中で、ただひとり、黙々と平面作品を描き続けた「画家」がいた。名を正延正俊という。南国高知の男である。正延正俊は一九一一年（明治四十四）年、須崎市に生まれている。高知県師範学校（現・高知大学）を卒業後いったん教職に就くが、復学して専攻科で美術を学んだ。その後上京し、小学校の教員として務めながら研鑽を重ね、一九四四（昭和十九）年、神戸へ転勤した。その五年後、正延は生涯の師・吉原治良と出会う。この時点で、正延は三十八歳。自らの画風を確立しつつあった。その五年後、吉原は「具体美術協会」を結成し、正延もこれに加わる。彼は「具体」の主要メンバーとしてグループの



正延正俊、「第13回具体美術展」会場にて、高島屋、大阪、1963年4月

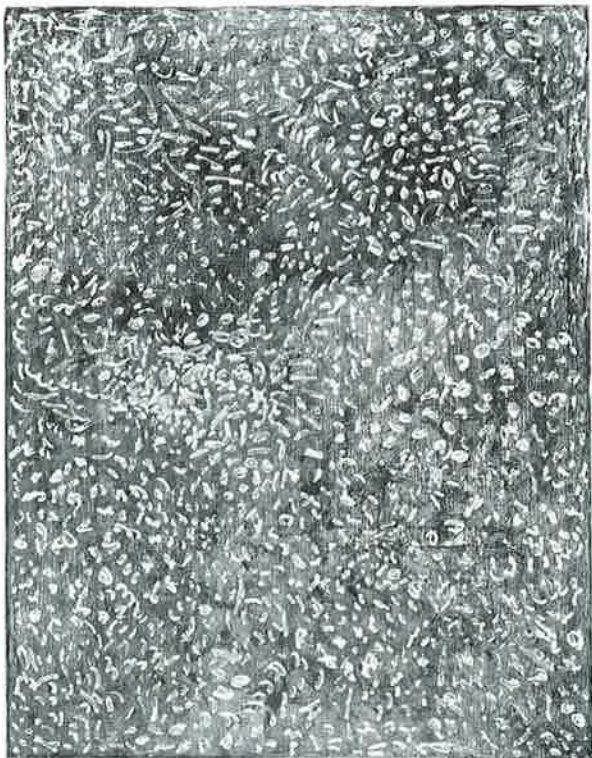
屋台骨を支え、それは一九七二（昭和四十七）年の吉原の逝去による「具体」の解散まで継続するのである。「具体」といえば先述した嶋本や村上、あるいは足で絵を描く白髪一雄や「電気服」の田中敦子など、派手なパフォーマンスが目立つアーティストの活躍に目が行きがちだが、その中で、ひたすらに平面作品を描き続けた正延の存在は誠に地味である。しかし、グループのリーダーであった吉原は正延

を高く評価し、正延は「具体」が主催したすべての展覧会（野外や舞台を除く）に出品、メンバーの中でも特に選ばれたもののみしか開催できなかった「グタイビナコテカ（大阪・中之島にあった『具体』の展示施設）」での個展も成し遂げている。筆者は先に「具体」は世界的に評価されていると書いたが、「具体」は海外では戦後のグローバルなアート・シーンを席巻した米国の「抽象表現主義」の絵画と、そのヨーロッパにおけ

る呼応といえる「アンフォルメル（『不定形』の意）」の日本版として紹介されており、戦後の尖鋭的な抽象画家として、正延はジャクソン・ポロックやジャン・デュビュフエと同じ土俵で勝負していたといえる。吉原の炯眼恐るべしというところか。「具体」解散後も正延は関西を拠点に制作活動が続けるが、決して生地・高知と縁を切ったわけではない。ご遺族によると、正延はどこにいても高知のことは忘れた

ことはなかったそうである。筆者は一九八九（平成元年）に高知県に採用され、当時の高知県で唯一の美術館施設であった県立郷土文化会館に赴任したが、早くも翌年、「県立美術館」の設立準備のため、県の教育委員会事務局に移ることとなった。郷土文化会館では毎年「郷土文化会館賞展」という、絵画の公募展を開催しており、正延は筆者が「郷文」を離れた年の同展に、公募外の特別出品というかたちで招待され、一九五八（昭和三十三年）年の旧作《作品「黄」》を出品している。高知でも絵画は日展系の具象作品が主流を占めており、会場に展示された正延の純粹な抽象絵画には違和感を覚えた記憶があるが、この作品はその年のうちに「郷文」に寄贈され、後に新設なった県立美術館に移管されている。寄贈申請書に添えられた手紙には「自分で気に入った小さい作品」とあった。もしも筆者が教育委員会に移らず、「郷文」に残っていたら、寄贈に関する事務手続きで作家本人と接触していたはずだが、生前はついに面会することはなかった。

今年には正延が没して二十年という記念の年である。正延が居を定めた西宮市大谷記念美術館と高知県立美術館では、共同企画というかたちで正延を顕彰する展覧会を開催することとなった。国立国際美術館をはじめとする主要な公立美術館に収蔵されている代表作はもとより、ご遺族が大切に保管されてきた制作初期の作品などにより、正延の画業をたどる。「世界の『具体』」の画家でありながら高知では「幻の画家」であった正延の全貌を紹介するまたとない機会である。是非ご覧いただきたい。



正延正俊 《作品「黄」》 1958年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館蔵

高知県立美術館企画展
「没後20年 具体の作家—正延正俊」
二〇一五年八月九日（日）
九月二十八日（月）

おくの かつひと
一九六三年 兵庫東加東市生まれ
一九八九年から県職員にして
学芸員。

高知が生んだ芸術家、 國友須賀の生涯を舞台に！

國友 悠一郎

高知市文化祭執行委員会から声がけいただき二〇一五年四月十一日、十二日高知市文化プラザからぼーと大ホールにて第六十七回高知市文化祭開幕行事「SUGA Spirits Never Die 受け継がれた虹色のバトン」を上演できましたこと、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

最初にこの舞台について語る為に読者の皆様には「國友須賀」の人となりを知っていただきたいと思えます。

須賀は一九五三年三月二十二日に幡多郡黒潮町に生まれました。祖父が氏神様である「須賀神社」にあやかり命名。名は体を表すといいますが、幼少期はやんちゃで周囲に自分を「鬼っ子」と呼ばせてけんか三昧。負けること、曲がった事が大嫌いな性格でした。

一生懸命にやる。それを実践したのです。

そして六月一日、五十八年間の生涯を終えました。

私はスタッフと共に、十九年間須賀の傍で精一杯、一生懸命に生きる姿を見て抱えきれない学びを受けとり、信念を守り行動する大切さを教えてもらいました。須賀の生き様に共感した人々は数多く共感から生まれた深い信頼がこのコミュニティを活かし続けています。

今回の舞台はスタジオ設立から現在までを描いたものです。高知の一般公募を含めた五十名と全国から愛弟子五十名、総勢約百名が参加し、料亭濱長さんも趣旨に賛同下さり三味線の児玉宝謹さんとよさこいの原点の舞を披露してくださいました。

須賀と芸術作品を創り続けて来られた岡野弘幹さんが音楽監督を担当、信藤真実さん、JODY 宮下天空さん、Tenさん、Daiさんがトップアーティストの技と、祈りの心を伝えて下さいました。

四国舞台テレビ照明をはじめとする各テクニカルスタッフも、一つになって舞台に心血注いでくださいました。またセントラルグループはじめ数多くの方に応援して頂きました。

また習ったことも無いのに、物心ついてすぐ宴会で自作の振り付けを大人達の唄にあわせ踊ったそうです。前世から知っていたかのようにだったと弟、國友積は語っています。

思春期に出合ったのが「演劇」でした。「白痴」というロシア文学の傑作を観劇した事がきっかけで一念発起！演劇部の無かった中村高校に全校署名を集めて、部を創設してしまいます。思い立ったらやり通す、意志の強い若者でした。

また理不尽さに対しては、迷う事無く自分を犠牲にしても闘う強さも併せ持っていました。

こんな事があったそうです。学校の帰り道、同級生の男子がこわいお兄さんに絡まれた場面にも偶然にも通りがかってしまった。



ビジネスの繋がりを超えて皆が須賀の生き様に共感して感動のエネルギーに突き動かされ、それぞれの立場で人事を尽くすという信頼を基盤とした「チーム須賀」が誕生していました。

私は、人が亡くなって積み重ねた実践は、エネルギーとして誰かの中で生き続ける事を知りた。それはみんなをひとつにしてしまう、愛のチカラ。

彼女の夢「世界のみんなに幸せになつてもらいたい」は人が根源的に持つシンプルな願いです。しかし何でも理想を現実にする為に地道に実践を続けることは難しく、志が高ければ向かってくる壁

のです。

須賀は迷わず彼らに食って掛かりました。

「大人の人が寄ってたかって弱いものいじめかえー名が廢るねー」すると車の中から親分が出て来て、

「この女の言う通りや。お前ら、いくぞ！」

そういつて立ち去って行ったそうです。

お礼を言う同級生の男の子に須賀は、

「こわかった〜…(涙)」と(笑)。

須賀のこと、少し伝わりましたでしょうか？困っている人を放っておけない、行動の人でした。

その後、桐朋学園大学演劇科を卒業し、劇団四季に入団。芸能界でも活躍をして、一九八三年に高知に戻りSUGA JAZZ DANCE STUDIOを設立。会員数は当時大ヒットした映画『フラッシュダンス』に後押しされてうなぎのぼり。そんな時に運命的な出会いをします。

そう「よさこい」です。踊る事で老若男女が生きるチカラを自ら興して行く姿を見て、須賀は感動し、セントラルグループの振り付けを担当した頃から、日本中にその魅力を伝えることになりました。「良い世さ来い」をス

も高くなります。須賀にとってそこに近づく為の燃料が「三無を正せ!!!」という信念で、目の前に立ちほはだかる壁を乗り越える為に最後は自らを捨ててみんなの道を開いた國友須賀。芸術家人生最後は作品創りではなく炊き出しでした。私はその生き様こそが本物のアートだと思っています。

この舞台がきっかけでたくさんの方に実践が産まれる事を願っています。そうなる事を須賀も満面の笑顔で見ていると思います。



最後に、今年戦後、広島・長崎では被爆七十周年の節目の年です。子ども達に、過去の教訓を学び、忘れず、明るい未来をイメージし

ローガンに、手弁当でハワイのホルルフェステイバルに二十年連続出場。ヨーロッパ、北南米、アジア、アフリカ、世界の様々な地域に日本発のニューカルチャー「よさこいミュージカル」を届けて行きました。

二〇〇一年九月十一日におきた、アメリカ同時多発テロの翌年、ニューヨークのグラウンドゼロに鎮魂と世界平和の祈りを込めてよさこいを踊りに行った体験から、より決意を固め「無気力、無感動、無責任を正せ!!!」と、その信念に自らを鼓舞させながら、日本全国にKANAIの精神を伝えて行きました。

やがて全国にダンススタジオ、教室を開設し、踊りで繋がったコミュニティが誕生していきます。そんな矢先、須賀は癌に冒され余命四カ月の宣告を受けました。最後の望みとして療養のため愛するハワイのマウイ島に渡るのですが、その二日後の二〇一一年三月十一日に東日本大震災、福島原発事故が発生、反対を押し切りすぐに日本に帰って来ます。須賀はよさこい仲間と連絡を取り、支援金物資を集め、被災地千葉県旭市の避難所に毎日四百食以上の炊き出しを一月間先頭に立ち行いました。困っている方に今やれる事を

て行動できる大人に成長してもらいたいと思います。広島原爆の残り火をテーマにしたダンスプロジェクトを立ち上げ、キャンドルナイトを企画し、語り部の方から体験をお聞きし、日本最大級の祭典「ひろしまフラワーフェスティバルのきんや YOSAKOI」に五月五日ゲスト出演し「Rise With Peace Flame」という踊りを踊らせていただきました。

未来の希望そのものである子ども達のハート、考え方が純粹でありますように。

芸術のチカラが必要です。それを信じて高知から世界へ平和への実践をし続けていきます。

くにとも ゆういちろう

一九七八年二月二十三日生まれ
スガジャズダンススタジオ代表。
高知を拠点に全国各地のよさこいプロデュース、ダンス、舞台演出を手がけている。社会貢献に繋がる会社運営を志し、精力的に活動。「無気力、無感動、無責任を踊りで正せ!!!」が座右の銘。

「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」始動しました!!

小松 由佳

横山隆一先生、やなせたかし先生、青柳裕介先生など数多くの漫画家を輩出している高知県。これまで、八月に開催してきた全国高等学校漫画選手権大会（まんが甲子園）は今年で二十四回目を数えます。県内の多くの高等学校に「漫画部」が存在することや、「高知漫画集団」や「高知漫画グループくじらの会」といったセミプロの漫画グループが長きにわたって活躍されていること、「黒潮マンガ大賞」や「4コマまんが大賞」など多くのまんがコンテストが開催されていることから、高知県には「まんが」が大切な文化として深く根付いていることが窺えます。

その高知県で、まんが文化をさらに盛り上げていきたいという思いから、二〇一五年二月二十一日、

二十二日に開催されたのが、「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」です。事務局は高知県文化生活部まんが・コンテンツ課内にありますが、県単独の事業ではなく、県内の経済団体、金融機関、企業、市町村、有識者のみなさんと約二年間にわたって準備、検討を重ねた結果として、満を持して実現したイベントです。ここでは、その内容の一部をご紹介します。

オープニングセレモニーには、漫画界の巨匠、『ゴルゴ13』のさいとう・たかを先生と『アリエスの乙女たち』の里中満智子先生が登場。まんが大好きタレントの中川翔子さんと知事も交え、まんがの魅力と可能性についてのトークセッションが行われました。



【オープニングセレモニー】
右から中川翔子さん、里中満智子先生、さいとう・たかを先生、尾崎正直知事、しんじょう君、ネッコロ

続いて、里中満智子先生と中川翔子さんの対談では、まんがに対する

海外での評価やまんがへの共感が国際交流の第一歩になったといったご自身の経験が紹介され、改めて「まんがの持つ力」を認識することができました。

併せて、まんが文化の担い手となる次世代を応援しようというイベントも開催されました。里中満智子先生の公開指導や、『深夜食堂』の安倍夜郎先生からのストーリー考案に関する講義、小中学生を対象にしたまんが教室、大手出版社の編集長四名による、売れるまんがについての座談会、プロの漫画家がチーム戦で作画対決をする「漫画家甲子園」、デジタル漫画の描き方講座などが開催され、漫画家志望の高校生、専門学校生等、県外からもたくさんの方に参加していただきました。首都圏からは距離があるこの高知県で、プロの漫画家の先生の技術を目の当たりにできる貴重な機会を提供することができたのではないかと思います。また、まんがを読むことが好きな方にとっても、プロの先生方のカット割りの工夫やテクニク、創作の裏話などを聞くことができる有意義な時間となりました。



【釣り好き漫画家との交流イベント】



【本日開校！まんが大学】



【漫画家甲子園】

左から、上條淳士先生、正木秀尚先生、河合克俊先生

そして、このイベントをきっかけとして、まんがと一緒に高知の自然や食、人を知ってもらおうと企画されたのが、『釣りバカ日誌』のやまさき十三先生、北見けんいち先生らと釣りを楽しむイベントや、『クッキングパパ』のうえやまとち先生らが考案した創作料理を楽しむ食事会、本県出身の安倍夜郎先生と『毎日かあさん』の西原理恵子先生お二人による得月楼でのトークショーなどです。いずれも会場は大いに盛り上がり、参加者からは、「漫画家の先生方の人柄を感じ、作品への興味も深まった」という感想が寄せられました。

このように、結果的には参加した多くの方が満足してくださったイベントでしたが、はじめての開催ということもあり、当日、はたして人が集まってくれるのかということを関係者一同、心配していました。そうした中、先にご紹介した県内の経済団体、金融機関、企業、有識者、そして何よりもゲスト漫画家のみなさんが、ホームページやご自身のフェイスブックやブログ、漫画雑誌のコメント欄などを利用した情報の拡散にご協力くださり、イベント当日には、

オープニングセレモニーが満員御礼となるなど、多くの方に参加していただける結果につながりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

なお、『釣りバカ日誌』のお二人の先生には、このイベントの準備の段階から高知の漁場や県民性に大変興味を持っていただき、イベント開催時期に併せて、『釣りバカ日誌 高知・幡多編』を全国誌に掲載していただきましたほか、食をテーマとしたまんがを執筆されている四人の先生方には、高知のお魚、お肉、野菜、加工品をご紹介し、これらを使った素敵な創作料理のイラスト画像やレシピを提供していただくことができました。

なお、「まんが王国・土佐」ポータルサイトにも、当日の写真やレポートまんがを掲載していますので、ぜひご覧になってください。
(<http://mangaoukoku-tosa.jp/>)

さらに、二〇一六年三月五日（土）、六日（日）に高知市文化プラザかるぽーとをメイン会場として二回目の「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」が開催されるのが既に決定しています。

初回より、さらに良いものとなるよう、企画立案中です。乞うご期待!!

たくさんの方の支援を得ながら産声を上げたこのイベントが、全国に誇れるような大きなものに、そしてまんが王国・土佐の魅力の一つに発展していくことを願っています。



こまつ ゆか

高知県南国市生まれ
高知県文化生活部まんが・コンテンツ課（「まんが王国・土佐推進協議会事務局」）主幹。

土佐の自然を未来に活かす 『高知県有用植物ガイドブック』の刊行

村井 亮介

今年の五月、ついに高知県内で見られる植物のうち、人間に有用性の高い植物がまとめられた『高知県有用植物ガイドブック』が完成しました。本書では、高知県高岡郡梶原町、香美市香北町谷相、そして室戸市室戸岬での植物調査

を基にそれら周辺に見られる身近な野草・葉草など三百五十四種をまとめました。さらに各地に自生する植物に関する言い伝えや、食経験などをコラムとして記載しています。

私達が生きる地球には、約三千万種以上の植物群が生育しています。そして、高知県は日本に自生する約六千種の顕花植物のうち約三千七百七十種が存在する植物の大変豊富な県です。自然が豊かで、植物の種数が多いという事は、それだけ多様性が高い地域と考えられます。そこで本書は、植物に恵まれた高知県の産業や観光、文化や教育に、高知の植物が役立つことを願って編集しました。

本書の監修・編集／著者であり、本の完成まで導いて下さったのが、

高知工科大学地域連携機構の渡邊高志客員教授です。渡邊客員教授は平成二十二年度以来、地域連携機構の植物資源戦略の一環として、高知県の有用植物を全域にわたって精力的に調査してきました。その成果として、本書では、有用性の観点から選抜した植物三百五十四種について豊富な写真と詳細な解説を加えています。掲載された植物のうち百八十七種は救荒植物と言われ、古くから凶作の折に役立てられてきた植物です。これらは、南海大地震の際に役立つ食料として知っておくとよいものです。私がこの本の製作に関わり始めたのは、五年前の平成二十二年頃からで、当手を振り返ると、まさかこんな日が来ようとは思いませんでした。この本の製作は、当然植物の調査から始まります。

山に入り、植物の写真を撮り、文章を書き起こし、すべての資料を精査し、編集を行いました。私に至っては、一眼レフカメラの使い方を覚えるところからスタートしましたので、編集を経験するところに至るまでに、途方もなく時間がかかっています。もし、本の製作だけを目標に始めたとしたら、刊行に至らなかったかもしれません。刊行に至ることができたのは、本書ができるまでに様々な取り組みがあったからだと思います。例えば、研究調査過程で集まる植物データは、将来に役立つためにデータベース化しました。この本に掲載されている写真、文章といったデータはすべて、Lupines (ルピナス) という植物のデータベースに (<http://www.lupines.net/>) 保管され一般公開されています。Lupinesでは、植物の和名だけでなく、漢名や英名、生薬名といった名称に関する情報や、産地や分布、利用部位や特徴といった様々な情報が記載されています。まだまだ情報の足りない種もありますが、本ガイドブックに掲載されている種に関しては、すべての情報が掲載されています。

もう一つ事例を紹介いたします。本書で紹介している江戸期以降の



書籍には、現代の私たちが口にしたことのない、忘れ去られた未利用食材が記載されています。これらの古文書に記載されている食材が食卓に並ぶなら、およそ百五十種以上の食材が新たに私たちの食卓を彩り、かつてない豊かな食文化が生まれるかもしれません。それは高知ならではの食文化で、非常に魅力的ですが、現代の我々は、それらの食材を実際に食してみるまで味は分からず、未利用食材のもつ可能性も分からずじまいです。そこで、二〇一三年には、高知県の未利用食材が実食できる「食のキャラバン」というイベントを開催しました。この企画は、高知県の新産業の創出に繋げる取り組みとして、「郷土の植物再発見—食文化観光の開拓—」をサブタイトルに掲げ、全六回にわたり、様々な場所で、地域住民や料理人と共に実施しました。イベントで出される料理には、普段口にするこ

材には、これまでに研究した、機能性が確認できた植物の一覧に、江戸期以降の救荒植物に関する書籍から整理した植物一覧を重ねること、食経験の有無の裏付けを行い、食べられるだけでなく、機能が期待できるものをピックアップしました。しかし、本書で上げた、古文書に掲載されていた食材は、天災などの緊急時に山野に入って採れる、食用にできる植物を数多く紹介することが目的とされているため、掲載されている調理方法は乏しく、産業や食文化として成り立たせるには、情報が欠けていました。古文書に紹介されている調理方法の多くは、「草木の大概は若葉を、水に浸して灰汁を取り、湯引きをした後に、醤油や味噌で和え物とする。または、お粥に加える」といった質素な手法しか掲載されておらず、調理するには実際に調理経験を得る他ありませんでした。

そこで食のキャラバンでは、聞き慣れない食材が、日本の食文化の中に、新たに受け入れられるきっかけを作ろうと、毎回違った地域の料理人と協力し、イベントの開催地や季節に合わせたテーマのある料理を創作しました。本書ではその一部をご紹介します。



本書で紹介する料理の解説文には、実は説明が足りません。読者が実際に調理するには、調理過程の情報以外に、植物の分量といった情報が必要なために、現時点ではレシピとしては不十分です。しかしながら、食べたことの無い未知の食材を紹介する書として少しでも活用され、皆さんの食欲を掻き立て、野山へ足を運ばせるきっかけとなれば、本書の目的が達成されると考えています。少し告知になりますが、今年度は高知市、室戸市、四万十川流域で、全四回食のキャラバンを開催する予定です。募集は高知工科大学地域連携機構のホームページ (<http://chikirenkei.org/>) で行います。ご興味のある方はぜひご応募ください。

最後に本書を手にした方は、高知県内の主要な図書館、または高知工科大学の地域連携機構にお問い合わせください。また、現在出版に向けて準備をしており、今年度の秋頃までには書店に並ぶ予定です。本書を手に取り、シマサルナシやガマズミ、フユイチゴといった秋の山の果実を探しに出てくださると、高知にまた一つ食の文化観光が広がるかもしれません。

むらい りょうすけ

高知工科大学地域連携機構客員
研究員。

エホン・デ・アソボン！ —西村繁男の絵本原画展—



高知出身の絵本作家・西村繁男さんの『ピチクルピチクル』、最新作『おばけもこわがるおばけ』の絵本原画を中心に、地元絵本作家の原画も展示します。西村さんによる絵本の朗読・バラバラ絵本づくりのワークショップなど絵本の世界を丸ごと楽しめる展覧会です。かるぽーと・高知こどもの図書館の2会場で開催します。

【かるぽーと】
2015年9月8日(火)～13日(日) 10:00～18:00 / 7F市民ギャラリー第5展示室
【高知こどもの図書館】(※火・木は休館)
2015年9月4日(金)～14日(月) 10:00～18:00 / 2Fあとりえほん



※入場無料
お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 088-883-5071 / 高知こどもの図書館 088-820-8250

イラスト: 西村繁男『ピチクルピチクル』より

風俗

電子書籍は救いのカミ

数年前から、私の読書の半分近くを電子書籍が占めるようになってきた。その理由にはいくつもある。歳とともに文庫本や新書などの文字が読みづらくなってきた。それに比べ電子書籍は文字の大きさを自由に指定できるし、明朝体の文字をゴシック体にすることもできる。なによりも、何冊もの本を並行読みしている私には、何十冊もの書籍データを手持ち歩く快感といったらないのだ。スマホでもタブレット端末でも、パソコンでも読むことができる。なにより、待ち時間などにスマホで読んでいた本の途中からそのままタブレットでもパソコンでも読めるし、その逆もできる。この利便性を味わってしまうと、もう後戻りができない。

半世紀以上経って著作権が切れた文学作品や歴史書などを、無料で読むことができるのも大きな理由に挙げられる。Amazonなどにもそれはあるが、「青空文庫」などを逍遙しているところ、こんな作家がこんなものを書いているのか、というふうには、実に面白い発見がある。例えば最近、坂口安吾の歴史書や墓に関する文章など、紙の本ではまず目につけ出すことができる。ただ、紙の本であればできるような、頁を見比べる必要があるような本には向いていないことや、内容の細かい点を見極めたり、振る舞いとすこづがいろいろなど、電子書籍にも欠点がないわけではない。しかし、若いものだけでなく年寄りの活字離れの原因を排除してくれる紙レスの電子書籍は、私にはいまい救いのカミとなっている。

(森)

第65回 高知市夏季大学

○7月27日(月)
『南海地震から生き抜く方策と一生モノの勉強法』
鎌田 浩毅(京都大学大学院人間・環境学研究所教授)

○7月28日(火)
『流れのままに』
片岡 鶴太郎(俳優・画家)

○7月29日(水)
『里山資本主義が開く高知の未来』
藻谷 浩介(日本総合研究所首席研究員)

○7月30日(木)
『思い出がつくれる歳になれば、軽ないでー、おもいでー。』
綾戸 智恵(ジャズシンガー)

○7月31日(金)
『子どもや部下や、あなたが変わる6つのポイント』
坪田 信貴(映画『ピリギヤル』原作者・坪田塾 塾長)

○8月3日(月)
『戦後70年を次世代にどう語り継ぐか』
保阪 正康(ノンフィクション作家・評論家)

○8月4日(火)
『チームスポーツ「カーリング」から得られるもの』
小笠原 歩(2015年カーリング女子日本代表)

○8月5日(水)
『「がんばらない」けど「あきらめない」心と体の健康法、教えますー』
鎌田 賢(医師・作家)

○8月6日(木)
『世界からのメッセージ—平和と命の大切さ—』
渡部 陽一(戦場カメラマン)

○8月7日(金)
『高知が行く!』
安藤 桃子(映画監督)

■日時
7月27日(月)～8月7日(金) 18:30～20:00
〔土・日曜日は休講の10日間〕
■会場
高知市文化プラザかるぽーと大ホール
■料金
通し券(受講料は10日間通しの料金です)
一般3,600円 割引2,600円
■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「天の川」 清遠 実奈
7月は、梅雨が終わり自分が好きな夏に入る月なので、夏の始まりを感じさせられる天の川を描きました。

(きよとう みな / 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



この家で初盆があり、昔ながらの大松明をともして、仏様を迎えていました。この地区でも50年ぶりに目にした行事ということでした。

高知を撮る

第31回写真コンテスト入賞作品

迎え火

(平成13年8月高知市鏡)

杉本 石

学生たちの卒業式は三月が中心だが、民間企業では「六十歳の誕生日の末日」というケースも少なくない。日本の高度経済成長を支えてきた団塊の世代の人たちは、すでに新たな人生を歩み始めている。団塊の世代より少し後の世代になるが、先日、高知を代表する放送人がまた一人、会社員生活を卒業。ごくごく親しい人が集まって卒業の宴が開催された。

小さな卒業式

風俗歳時記



テレビ放送が日本では始まったのは、一九五三年。それまでは専らラジオが情報収集の手段だった。高知での民放一局目のRKCは、ラジオ高知の頭文字をとって略称がつけられていることでもお分かりいただけるだろう。二局目のテレビ高知が開局したのは今から四十五年前。先発局のRKCとの違いを前面に出し、どこよりも早く夕方のニュースワイドを立ち上げたり、歌をツールにして地域密着番組を制作したり、次々に新企画打ち出してきた。そして一九九七年にさんさんテレビが参入し、高知エリアも放送局三つ巴の時代に入る。

テレビは、インターネットなどのSNSと違って、スイッチ一つで誰もが簡単に同じ空間で見ることができ非常に便利な機器である。かつては、お茶の間の中心にテレビがあつて、一家団欒に役立った時代もあった。今では、一人暮らしのお年寄りの相手という位置づけも加わり、高知の放送文化を支えてきた人たちは、そんな時代の変遷とともに、視聴者のニーズを敏感にキャッチしながら生きてきた。

この程卒業した大先輩は、テレビが一家の中心的存在から、他のメディアと競合し、個々所有の存在に変わってきた。ちょうど四十年前を見

(立花香)



マンガで世界を 変えようとした男 ラルフ・ステッドマン

ITC/FILM presents "FOR NO GOOD REASON", CHARLIE PAUL, with ABOUT RALPH STEADMAN, JOHNNY DEPP, RICHARDE BRANT, TERRY O'NEILL, JANN WENNER
with SLASH, JASON MURRAY, HAL WILLNER, THE ALL-AMERICAN JECKS, LUCINDA BELLE LOW, and SACHA SKAMEN
written by JODY DEE, produced by LUCY PAUL, www.filmforreason.com

監督 / チャーリー・ポール
出演 / スラッシュ、ジャソン・マラズ、ハル・ウィルナー、ザ・オール・アメリカン・ジャックス、リチャード・ブ兰特、テリー・オ'Neill、ジャン・ウェナー
2013年 / アメリカ / 100分 / カラー / 12歳以上 / 横山隆一記念マンガ館 / 映画 / ステッドマン



横山隆一記念
まんが館
YOKOYAMA MEMORIAL MANGA MUSEUM
〒780-8509 高知市九反田2番1号

7月18日(土) ①13:00 ②15:00 ③17:00 ④19:00

高知市文化プラザかるぼーと小ホール 前売券1,000円 / 当日券1,200円

前売券販売所◎高知市文化プラザミュージアムショップ、高知大丸プレイガイド、高知県立美術館ミュージアムショップ

主催◎公益財団法人高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館 お問い合わせ◎横山隆一記念まんが館 TEL:089-883-5029